

開催
報告

世田谷会主催による東京第三ブロック親睦イベント 『企画展「花森安治の仕事－デザインする手、編集長の眼」 と世田谷美術館30年の歩み』

世田谷会幹事 富所 淳

2月11日(土)、世田谷会主催による東京第三ブロック親睦イベントが開催されました。桜の名所としても知られる砧公園の北側に内接する世田谷美術館は1986年に設立され、昨年で開館30周年を迎えました。今回、美術館の多大なご協力を得て、折しも当日より始まる「花森安治」の企画展観覧に加え、世田谷美術館にまつわるレクチャーに併設レストランでのフランス料理(フルコース)も堪能するという、ちょっと「優雅な」企画を実現する運びとなりました。

好天に恵まれた当日は、ほぼ定員一杯となる49名の方々がご参加くださいました。1階の講堂に集まった参加者はまず、橋本善八世田谷美術館学芸部長からのレクチャーを受けました。学芸部の日々の仕事の紹介に始まり、世田谷美術館の建築的特徴、芸術を「日常生活(衣食住)と融合させ」「心を健康にする」と位置づける基本思想、その実践としての演奏会や演劇、各種ワークショップの開催など子どもから大人まで幅広く対象にした継続的教育普及活動についてなど、普段なかなか聞けない内容が満載で、参加者の皆さんは熱心に耳を傾けていました。さらに、界隈の住宅状況や交通事情の歴史的変遷、美術館の「今」につながる大正・昭和初期の「世田谷の作家たち」のエピソードなど、当時の記録や写真・絵画等も交えた講義は、美術館を奥行き深く理解させてくれるもので、ときおり笑いを誘う機知に富んだ橋本氏の語りにも惹き込まれ、1時間は瞬く間に過ぎました。



橋本学芸部長によるレクチャー

続く企画展では、雑誌『暮しの手帖』でテストされた当時の一群の商品をはじめ、学生時代から戦時下での活動における貴重な資料の数々を観覧しました。観覧ではレクチャー時の「単なる編集者ではない『思想家』としての花森も観てほしい」とのアドバイスが役に立ち、また、展示物の一つひとつに付された簡潔な解説文にも「苦労話」が思い起こされ、1時間では見きれないほどの展示品に参加者の皆さんも腰を屈めて見入っていました。個人的には、展示の一隅に流れる編集者としての心構えを語る花森の肉声(録音)がとても印象的でした。(ちなみに今回の企画展、NHK朝ドラ『とと姉ちゃん』の「便乗」ではなく、数年前より企画構想されたものであったことを美術館に代わり付記しておきます。)

観覧を終えた参加者は夕闇のせまる渡り廊下を通過してフランス料理レストラン「ル・ジャルダン」へ。懇親会は梅田泰宏世田谷会会長による挨拶と田之倉敦司東京会副会長による乾杯のご発声ではじまりました。日ごろ見知った顔でも家族を伴っての交流は新鮮で、また、ちょうど空腹を見計らったかのように料理がはじまり、会の雰囲気は終始なごやかでした。コースの目玉「オマール海老のアメリカーナ(甲殻のソース)」をはじめ前菜からデザートまで、いずれも趣向を凝らした美味しい料理とお酒に、歓談は閉会まで途切れることがありませんでした。ライトアップされた窓外の庭園と樹木に「やがて森の中の美術館になるだろう」との美術館設計者の遠大な計画(橋本氏)がよぎる頃、会は惜しみつつお開きとなりました。「初参加だが楽しかった」との声も多く聞かれました。支えてくださった関係者の皆様方に厚く御礼申し上げます。



懇親会の様子